

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10493

研究課題名（和文）精神疾患の親をもつ思春期の子どもの健やかな育成支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a program to support the healthy upbringing of adolescents with mentally ill parents

研究代表者

田野中 恭子（Tanonaka, Kyoko）

佛教大学・保健医療技術学部・准教授

研究者番号：50460689

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：精神疾患の親をもつ子どもが経験した年代別の困難と支え、支えに対する子どもの気持ちを明らかにした。ドイツの支援者との交流を通して児童向け書籍を翻訳出版した。調査結果をふまえ、子どものインサイトに着目したメッセージを検討し、支え（情報、相談、子どもの集い、自分の時間）につながると思える高校生以上向けパンフレット・Webサイトを開発し公表した。高校生・大学生への調査では、パンフレット閲覧後に情報を探し、相談しようと思う割合が閲覧前より多く、パンフレットの有効性が示唆された。一方、教員研修前後に参加者に質問紙調査を行ったところ、精神疾患の理解や親子への対応・多職種連携への意欲が有意に向上した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の精神疾患の親をもつ子どもの年代別の困難が明らかになり、子どもへの情報提供や相談による気持ちの支え、子どもが自分のための時間をもつことの重要性が示唆され、今後の支援の発展につながる。また、子どもが支えとつながろうと思えるWebサイトを公表したことで、これまで困難を誰にも相談できずにいた子どもの一助になるものと考えられる。本研究で開発した教員研修プログラムは教員の親子への理解や対応を促進し、子どもの身近に理解者が増えることにつながる。また、国が進めるヤングケアラーに関する関係職種への啓発研修会の参考になるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Identified the difficulties and supports experienced by children with mentally ill parents at different ages, and the children's feelings about the support. A German book for children was translated and published. Based on the results of the survey, messages that focus on children's insights were considered, and a pamphlet and website for high school students and older were developed and published to encourage them to connect with support (information, consultation, children's gatherings, and time for themselves). In a survey of high school and college students, a greater percentage of them were willing to seek information and consultation after viewing the pamphlet than before, suggesting the effectiveness of the pamphlet. Questionnaire surveys of participants before and after the teacher training significantly improved their understanding of mental illness and their willingness to deal with parents and children and to cooperate with multiple professions.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：精神疾患の親をもつ子ども 精神障害者 精神障害者の家族 精神保健 学校保健 ヤングケアラー 家族支援

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

欧米では子どものうち、精神疾患の親をもつ子ども(以下、子どもと記載)が13%以上(Parker, 2008, Mattejat, 2011)おり、子ども自身が精神疾患を発症する割合は一般に比べ2倍以上である(Pollak, 2008)ことが明らかにされている。国内では該当する割合は把握されていないが、うつ病をはじめ精神疾患患者数は年々増加しており、その子どもの数は少なくないと考えられる。しかし、その子どもの困難な生活や気持ちに着目した支援には至っていない。

これまでの調査から、子どもは疾患に関する十分な説明を受けておらず、家庭や学校生活での困難や苦しい気持ちに対して、寄り添い共に考えてくれる人がおらず、精神的に不安定になることを明らかにした(田野中, 2018)。

一方、学校教員は当該の子どもが各校一定数おり、関わり方を理解したいという要望があり、教員研修を行ったところ高評価を得た。これらの成果より、困窮する子どもへの直接的支援と周囲の大人への子どもに対する理解を促進するという間接的支援の両面からアプローチする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神疾患の親をもつ思春期の子どもの健やかな育成支援を目ざす支援プログラムの開発である。そのため、第1に、思春期の子ども向けのパンフレットの開発、第2に、教員向けの啓発研修プログラムを開発する。

3. 研究の方法

1) 思春期の子ども向けパンフレット・Web サイト開発

(1) 子どもの経験に関する調査結果分析とパンフレット内容の検討

精神疾患の親をもつ対象者10名に、子どものころに経験した困難と支えに関して半構造化面接を行い、質的記述的研究によりカテゴリーを抽出した。結果を踏まえてパンフレットの内容について検討を行った。

(2) 国内外のパンフレットの把握と支援先進国であるドイツの研究者との意見交換

欧州で普及している年代別パンフレットのうち、「It's my turn (12歳以上の子どもへの情報)」や国内外のパンフレットを集約し、内容の相違点や工夫等について分析した。また、支援が進むドイツの研究者から子ども向けの情報や支援内容について聴取し意見交換を行った。

(3) 事前調査 子どもの支えに対する気持ち・子どもから子どもへのメッセージ

子ども自身が自分を大切にしながら安心して生活し成長するために必要な支え(情報、相談、子どもの集い、自分の時間)を知り、つながろうと思えるパンフレットやWebサイトの開発を行うため、ソーシャルマーケティングの知見を活用し、子どもの気持ち、インサイト(対象者自身も意識していない行動の決め手につながる視点)に考慮したメッセージの掲載を目指した。掲載内容を検討するために事前に子ども33名に自記式質問紙調査を行い、支えに対する気持ちを選択回答と自由記述回答とし、記述統計および質的記述的分析を行った。また、子どもから子どもへのメッセージの記載も依頼した。

中学高校大学生にパンフレットに掲載するイラストや写真、ページ数等のニーズを調査した。

(4) パンフレット作成

各種調査結果をふまえ、原案を作成した。原案は精神科医や精神障害者の子ども相談の経験が豊富な支援者に医学的妥当性や内容の適切さについて意見を聴取し修正した。また、中学高校大学生のニーズ調査をもとに、デザインで希望が多かった写真の撮影、パンフレットやWebサイトのデザインをプロに依頼し、手に取りやすく見やすい内容とした。

(5) パンフレット公表前調査

精神疾患の親をもつ子どもの集い参加者に公表前のパンフレット案をみてもらい、文章やデザインについて意見集約を行い修正した。

(6) パンフレット公表後の評価調査

保健医療福祉の関係機関190箇所、中学校・高等学校270箇所にパンフレットおよびアンケート調査協力依頼を郵送した。質問内容は子どもへの紹介や配架の有無についてであった。

高校生・大学生585名にパンフレット配布、Webサイト紹介を行い、内容に対して無記名調査を実施した。質問内容は、対象者の基礎情報と閲覧して各支えにつながろうと思うかを4件法で尋ね、その理由を自由記述で求めた。分析は、記述統計および自由記述内容について抽象度をあげて分類した。

2) 教員向け啓発研修プログラムの開発

(1) 教員研修の既存内容の把握と分析とプログラム開発

これまで調査と研修プレテスト評価をもとに、教員研修の経験豊富な分担者と意見交換を行い、内容の改定を行った。

(2) 教員研修の実施・評価

教員研修会（対象 60 名・6 時間 / 回）×6 回を実施し、研修会最終年に参加者 40 名に研修会前・後に自記式質問紙調査を行った。質問内容は受講者の基礎的情報、講習の効果に関する質問内容は、KAP モデルを参考に作成し、11 段階選択肢への回答および自由記述とした。分析方法は、評価の前後比較は中央値を算出し、ウィルコクソンの符号順位検定（有意水準 $p < .05$ ）を行った。自由記述は質的帰納的に分析した。

4. 研究成果

1) 子どもの経験に関する調査結果～子どもが経験した困難と支え

子どもの困難は全年代を通して【わけの分からぬまま親の症状をみるしかない生活】や【親の言動に振り回される精神的不安定さ】、【心許せる友達や安心できる場所のない苦しさ】、【我慢だけ強いられ周囲からも支援を受けられない苦しさ】があった。特に学童期から思春期にかけては【世話をされない苦しい生活】があり、青年期以降は【青年期以降に発達への支障を自覚する生きづらさ】が明らかになった。

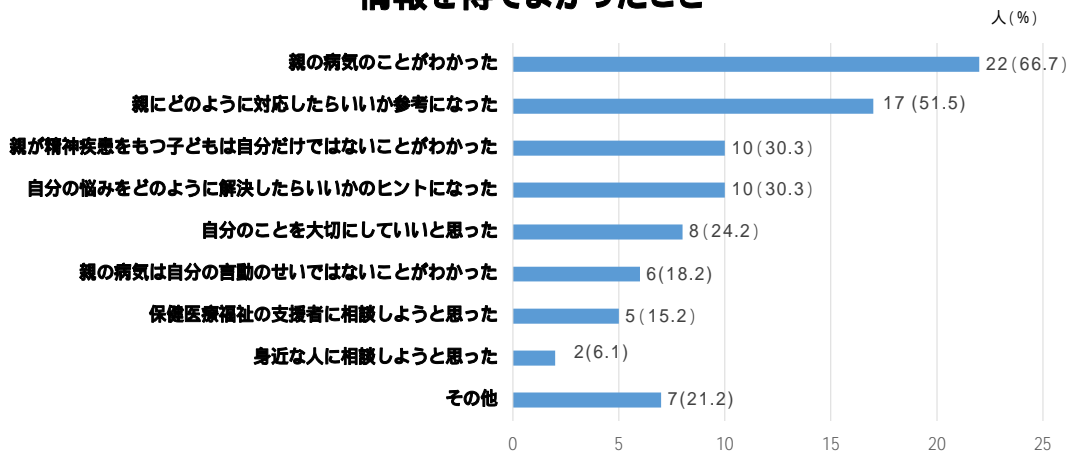
子どもは精神面だけでなく生活面を含む困難を家庭内外にもっていた。今後、子どもの疾患理解や生活を支援し、子どもとの関係づくりをした上で気持ちを支え、青年期以降も支援を行うこと、社会での精神疾患に関する啓発活動の重要性が示唆された。

2) 子どもの支えに対する気持ち・子どもから子どもへのメッセージ

子ども 33 名の各支えに対する気持ちとして、情報を得てよかったことは「親の病気がわかった」66.7%、「親への対応の参考になった」51.5%、情報を得られなかった理由は「誰も説明しなかった」54.5%、「どこに知りたい情報があるかわからなかった」42.4%であった。

相談してよかった人は、同じ立場の子ども 51.5%、友達 36.4%、親の主治医と学校教員が各 18.2%、相談しなかった理由は、「相談しても何も解決しない」「精神疾患を理解していない」「結局自分ではないといけない」「自分のことを理解してくれない」各 60.6%であった。

情報を得てよかったこと



自由記述で相談してよかったことは「気持ちを受け止め理解してくれ孤独感が軽減」、「生きづらさの原因がわかり問題解決方法や考え方を知ることができた」などがあった。子どもの集いに参加してよかったことは「同じ境遇の人が親の話や困りごとをわかってくれ感情の共有に癒された」、「他にも同じように悩んでいる人に出会え一人ではないと思えた」など、自分の時間をもちよかったことは「自分を取り戻せなんとか自分を保てた」などがあった。

一方、人に相談しようと思わなかった理由として「相談したところで何も解決しない」等があった。本研究結果をふまえ、子どもが支えにつながろうと思えるメッセージを検討し、情報誌に掲載した。

3) 図書翻訳出版、パンフレット、Web サイトの公表

ドイツの児童向け図書「悲しいけど、青空の日 親がこころの病気になった子どもたちへ」を翻訳し、日本の子ども支援について追記し出版した。また、子どもが支えにつながるように「CAMPs（精神疾患の親をもつ子ども・若者）～あなたの大切な時間」パンフレット・Web サイトを開発し公表した。



4) パンフレット・Web サイトへの評価

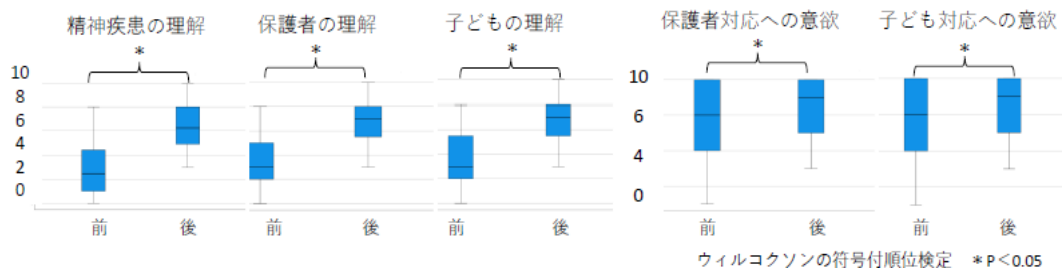
回答者は高校生 273 名、大学生 44 名の合計 317 名、回答率 54.2%であった。パンフレット閲覧前後（以下、「前」「後」と記載）の各支えにつながる「思う」「やや思う」人の割合は、「情報を探してみようと思う」は前 45.8%が後 77.3%、「相談してみようと思う」は前 33.5%が後 46.1%であった。相談では「助けてくれる存在を知った」などがあった。一方、「理解してもらえなかったら怖い」などの回答もあった。自分の時間では「親のためだけでなく自分の時間も大切にすることが大事だとわかった」などがあった。

パンフレット等の配付閲覧により、子どもが支えにつながろうと思えることが示された。一方、理解されなかったら怖いなど子どもが直面している困難も示され、精神疾患や子どもの直面している困難などについて学校で伝えていくことの重要性が示唆された。今後、本研究結果をもとに子どものインサイトに着目したメッセージを検討し、掲載内容や啓発方法を検討していく必要がある。

5) 教員研修の実施と評価

教員研修会は 6 回、教員計 500 名が参加した。前後比較の質問紙調査の分析対象は 40 名であった。年代構成は 30 代 19 名 (47.5%) が最も多く、学校種は保育園・幼稚園 8 名 (20.0%)、小学校 8 名 (20.0%)、中学高等学校 21 名 (52.5%)、特別支援学校 2 名 (5.0%)、その他 1 名 (2.5%) であった。当該の親子と関わった経験は、3~5 件の 15 名 (37.5%) が最も多かった。回答を前後比較した結果、「精神疾患の理解」($p < .001$)、「保護者の理解」・「子どもの理解」($p < .001$)、「保護者対応への意欲」($p = .025$)、「子ども対応への意欲」($p = .017$)、「同僚・多職種と連携してみようと思う」($p = .004$) 等、全ての項目で有意に向上していた。

講習会前後比較 知識・態度の11段階評価：0「全く当てはまらない」～10「非常にあてはまる」



自由記述は、【教員が精神疾患を理解する必要性】では、“精神疾患はあまり身近にないと思っていたが、説明を聞いて心あたりのある家庭がいくつか思い浮かんだ。精神疾患への理解が浅すぎた。講習をきっかけにより深く考えていきたい”や【親子の関わり方の理解】【学校間や行政との連携の必要性和難しさ】などが得られた。講習内容は、学校教員の当該親子の状況・関わり方の理解促進に効果があることが示された。本研究結果は国が進めるヤングケアラーに関する関係職種への啓発研修会の参考になるものとする。結果を踏まえて、今後の研修内容・方法などの改善を行う必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤澤大介、石川博康、佐藤純、田野中恭子、田島美幸、大江美佐里	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 ケアする人のケアを考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知療法研究Japanese journal of cognitive therapy	6. 最初と最後の頁 129 - 138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanonaka Kyoko, Endo Yoshimi	4. 巻 -
2. 論文標題 Helpful resources recognized by adult children of parents with a mental illness in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jjns.12416	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田野中恭子	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 精神疾患の親を持つ子どもの困難	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本公衆衛生看護学雑誌	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15078/jjphn.8.1_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田野中恭子	4. 巻 33-2
2. 論文標題 精神疾患の親をもつ子どもへの支援 ドイツの子ども支援と日本への応用に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本精神衛生学会 こころの健康	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤純	4. 巻 50-2
2. 論文標題 日本の精神保健福祉領域における家族支援の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 136-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田美枝, 佐藤純, 田野中恭子, 静津由子, 熊取谷晶, 高田亮, 田中由記美	4. 巻 2
2. 論文標題 家族(ケアラー)の相談継続に必要な要素と 相談の在り方 -精神障がいや社会的ひきこもり状態の本人をケアする家族への調査から -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都文教大学地域協働研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤純	4. 巻 5
2. 論文標題 ヤングケアラーに求められる支援 精神に「障害」のある親と暮らす子どもを中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生活環境研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田野中恭子 佐藤純 緒方靖恵 土田幸子
2. 発表標題 ヤングケアラー・精神疾患の親とその子どもに関する学校教員への講習効果の検証
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田野中恭子
2. 発表標題 ヤングケアラー・精神疾患の親をもつ子どもが必要とする支援
3. 学会等名 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長沼葉月、北野陽子、細尾ちあき、田野中恭子、上野里絵
2. 発表標題 精神疾患のある親とその子ども-親子の支援と「絵本」の活用
3. 学会等名 日本家族療法学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤澤大介、石川博康、佐藤純、田野中恭子、田島美幸、大江美佐里
2. 発表標題 大会企画シンポジウム「ケアする人のケア」
3. 学会等名 第20回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田野中恭子、大崎菜穂子
2. 発表標題 精神疾患の親のいる子どもが必要とした支援
3. 学会等名 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田野中恭子, 佐藤純, 土田幸子, 緒方靖恵
2. 発表標題 精神疾患の親がいる子どもの支えに対する気持ち
3. 学会等名 第82回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 シュリン・ホーマイヤー著、田野中恭子訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 サウザンブックス社	5. 総ページ数 136
3. 書名 悲しいけど、青空の日 親がこころの病気になった子どもたちへ	

1. 著者名 長沼葉月, 田野中恭子, 土田幸子, 吉岡幸子, 上原美子, 森田展彰, 北野陽子, 牛場裕治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 子どもの虹情報研修センター (日本虐待・思春期問題情報研修センター)	5. 総ページ数 116
3. 書名 子ども虐待に関する文献研究 親の精神疾患と子どもの育ち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>精神疾患の親をもつ子どもと若者向けHp 「CAMPs あなたの大切な時間」 https://camps-t.com/ 精神疾患のある親をもつ子どもを支える https://bukkyo-u-research.jp/research/research33/ 精神疾患の親をもつ子どもの経験と教員研修の試行 (博士論文) https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/85359/32234_Abstract.pdf 動画「悲しいけど、青空の日 親がこころの病気になった子どもたちへ」 https://www.youtube.com/watch?v=m-JaWohaUsQ</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	甘佐 京子 (Amasa Kyoko) (70331650)	滋賀県立大学・人間看護学部・教授 (24201)	
研究分担者	土田 幸子 (Tutida Sachiko) (90362342)	鈴鹿医療科学大学・看護学部・准教授 (34104)	
研究分担者	佐藤 純 (Sato Atsushi) (90445966)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授 (34312)	
研究分担者	緒方 靖恵 (Ogata Yasue) (00880387)	佛教大学・保健医療技術学部・助教 (34314)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日独研究者・支援者交流集会～精神疾患の親をもつ子ども、家族支援	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関